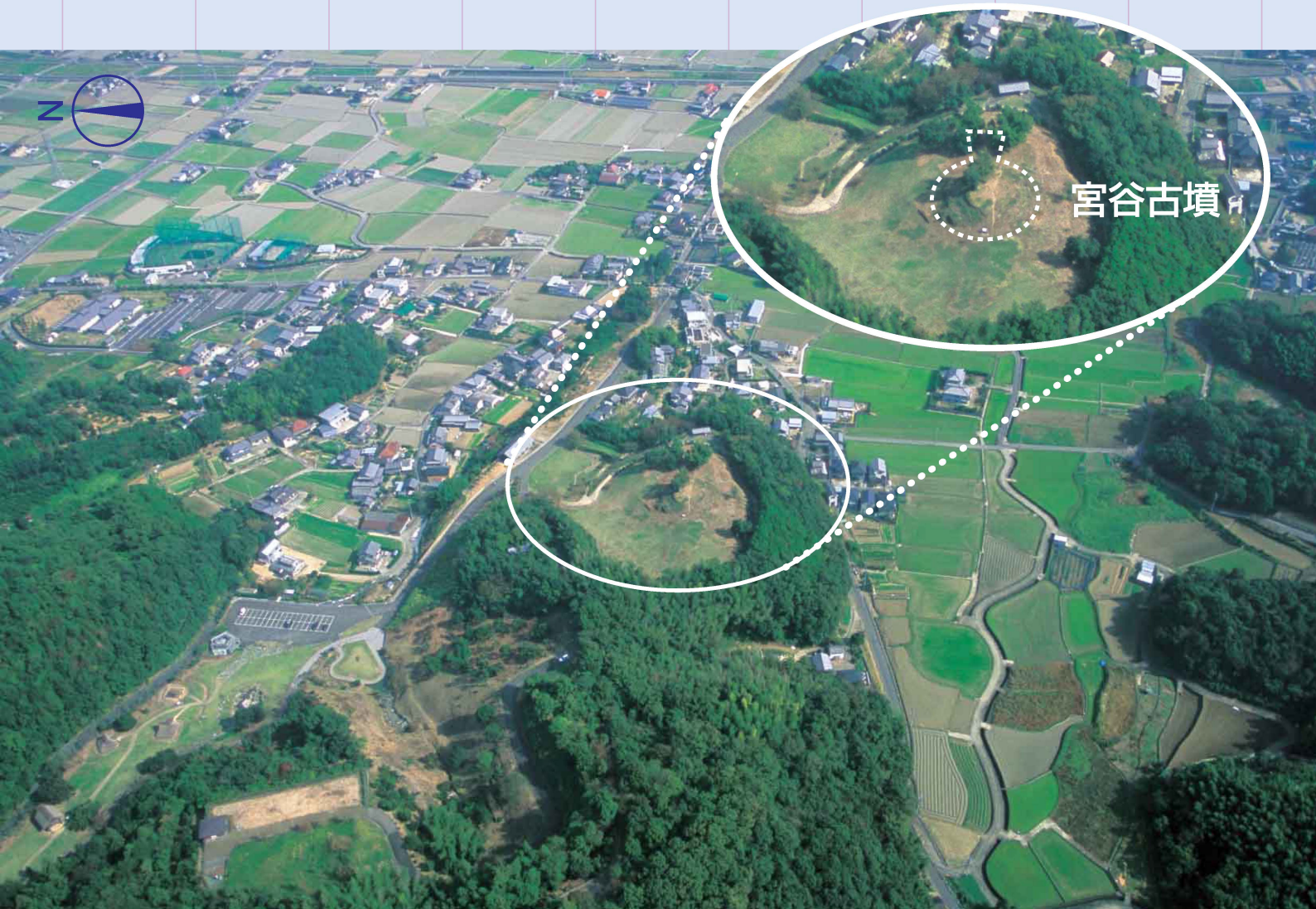


博物館 ニュース

Museum News
No.73



みや だに

宮谷古墳

宮谷古墳は、徳島市国府町西矢野の気延山^{きののべやま}から東に延びてきた尾根の先端^{せんたん}近くに立地する前方後円墳^{ぜんぽうこうえん}です。長さ約38mで、後円部の直径と前方部の長さが2：1の割合でつくられています。前方部は東の平野部の方を向き、端に近づくに従って少しずつ幅広となっています。空から見ると、古墳の形ばかりでなく、古墳の立地する尾根やその両脇に入り込む谷の様子までよく分かります。

宮谷古墳からは三角縁神獣鏡^{さんかくぶちしんじゅうきょう}3面が出土し、また、二重口縁の壺型土器^{こうえん つぼがた}が並べられていました。これらの出土品から、宮谷古墳は3世紀後半につくられたと考えられています。

(考古担当：高島芳弘)

テグスになった蛾^が

大原 賢二

一本釣り^{どうのうら}と堂浦

「一本づりはむろん、古代からあった。しかしそれを技術として高度に発達させたのは、徳島県の堂ノ浦の漁師である。」これは司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズの「明石海峡と淡路みち」の一節で、民俗学者として有名な宮本常一の『海をひらいた人びと』の中に書かれた一本釣りの項目を紹介した文章です。

また、同じシリーズの『阿波紀行』では、以下のように書かれています。「江戸初期、堂浦の漁師^{なにがし}某(名は伝わっていない)が、大坂見物に出かけたとき、薬問屋の町である道修町で奇妙なものを見た。(中略)そこでは薬用の草根木皮^{そうこんもくくり}を中国(清国)から輸入(長崎経由で)していた。

それらの生薬は油紙で梱包^{こんぼう}されていて、半透明の糸でからげられている。堂浦の某がテグスをひろい、ひっぱって韌度^{じん}をみるとじつによい。半透明だから、水中でも、糸とは見えないはずで、これで一本釣りをすれば大いに魚がつかれると思った。店の主人にこの糸についてきくと、『これは天蚕子^{てんさんす}というのやが』どうせ捨てるものだからいくらでも持って行っていいが、いったい何に使うのだ、というので、某は目的を話した。

主人は乗り気になって、そういうことなら今後はこの糸だけを輸入してもいい、ついではこのテグスを瀬戸内海沿岸の浦々を回って実地に使って見せ、需要を高めてもらえまいかといった。

漁師某は普及販売員になったのである。」

このように堂浦の漁師がテグスを発見し、一本釣りがそれによって発展していったこと、さらに有名なテグス船へとつながっていく流れを紹介しています。そのテグス発見の時期は、八代将軍吉宗のころにあたるのではないかと推定されています。

テグスとは？

徳島県鳴門市瀬戸町堂浦の漁師たちが、江戸時代に「テグス」と呼ばれる糸に出会い、それを初めて釣り糸として利用したらしいことは上に紹介したとおりです。

今ではナイロンやテトロンをはじめ、各種の合成繊維^{せんい}で丈夫な釣り糸^{じょうぶ}ができており、魚を釣る時には当然そのようなものを糸として使っています。しかし、テグスのないもっと古い時代には、ツル性植物のクズやフジなどの内皮や麻などの繊維でできた糸等を釣り糸として釣っていたと宮本は書いています。では、釣りの歴史を変えた本来の「テグス」とはいったいどういうものなのでしょう。

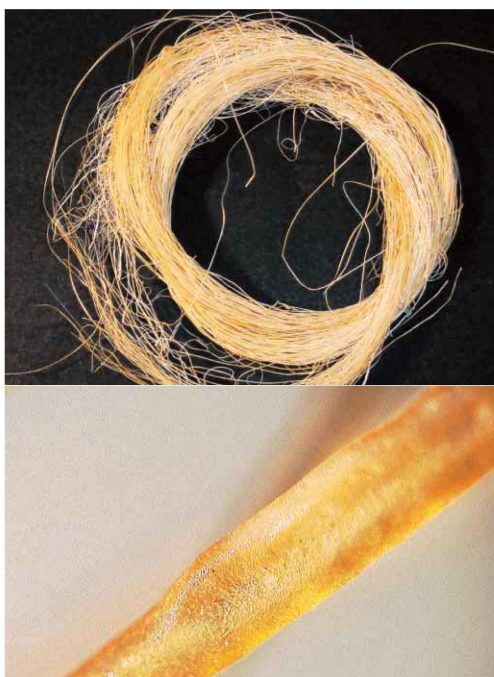


図1 粗テグス。上：全体、下：部分拡大
(丸くなっていない部分も見られる)

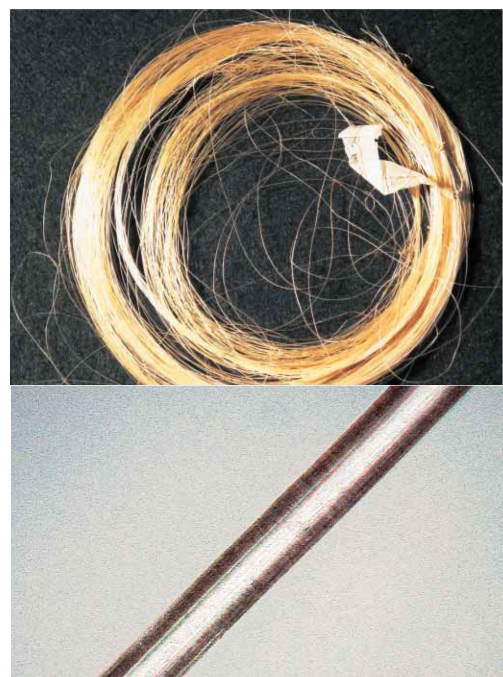


図2 精製されたテグス。上：全体、下：部分拡大
(少し細く、表面はきれいである)

司馬は、「明石海峡と淡路みち」の中で次のように書いています。「平凡社の、『大百科事典』の『てぐす』の項をみると、中国で楓蚕とよばれ日本でテグス蚕とよばれる虫からつくるといふ。要するに、イモムシである。(中略)つくり方は、いつの時代なのか、ともかくも中国人が発見した。右の百科事典によれば、そのテグス蚕を水槽に入れて殺す。ついで虫の体内から絹糸腺をとりだし、薄い酢酸溶液(中国の古くは、おそらくすであつたろう)にひたし、さらにこれを展糸板の上でひきのばして、陰干しにする。それでも、粗テグスができ、それをさらに精製して商品化する。」

つまり、中国の楓蚕の幼虫の絹糸腺からできるものということらしい。当館資料のテグスを調べると、粗テグスも精製されたテグスも1本ずつ、それも鳴門市堂浦の方からの寄贈品として収蔵されていました(図1, 2)。粗テグスは中国海南島産でした。この粗テグスを鉄や銅の板に細く丸い穴を開け、その穴を通して表面をきれいに加工したものが精製テグスです。おそらく、これらの資料が徳島県でも数少ないテグス資料だろうと思われれます。

テグスというなまえ

漢字では天蚕子(糸)と書かれることが多いテグスですが、司馬は広東語が福建語であるとしています。天蚕というのは日本ではヤマム(山繭)のことをさし、幼虫はクヌギなどの葉を食べて育ちます。なぜこの天蚕という漢字をあてたのが気になり、中国にもヤマムが分布しているのかを高松市の蛾類研究家の増井武彦氏に尋ねてみました。「ヤマムは中国の図鑑では、『半目大蚕蛾』、



図3 テグスサンの成虫(中国広西省産)。

台湾の図鑑で、『大透目王蛾』となっています。」という返事をいただきました。ヤマムも分布はしているようですが、この中国名からテグスという音になったとはちょっと考えにくく、天蚕は野生のカイコガの総称かもしれません。

テグス蚕の正体

10年ほど前、北九州市立自然史博物館の上田恭一郎博士から、「中国産の蛾の標本を調べていたら、昔テグスを採っていたといわれているテグスサンが入っていた」という連絡をもらいました。実物が入手できると思っていなかった私は驚くと同時に、この蛾は、当館に是非、収蔵したいものとして収集の目標に掲げ、中国のチョウや蛾に詳しい東京の西山保典氏になんとかテグスサンを手に入れてほしいと依頼しました。

2008年7月、その西山氏から、「中国の広西省の蛾を少し送ります」という手紙とともにいくつかの標本が届きました。私は、その中に2頭の中型の蛾があるのに気がつきました。展糸板の上でハネを開いて、図鑑と比べてみると、この蛾こそ、テグスサンと呼ばれるものでした。中国では楓蚕と呼んでいます。学名は*Eriogyna pyretorum* Westwood, 1847で、この蛾の幼虫からテグスを採ったことは、世界のカイコガのなかまをまとめた有名な図鑑の説明にもちゃんと書かれています。かなりきれいな蛾であることに驚くとともに、さて、この次はこの種の幼虫が手に入らないかと考えています。生きたチョウや蛾は外国からは許可なく持ち込むことはできませんが、この蛾の幼虫を飼育してなんとかテグスを作りたいものです。

ある意味、漁業を変えたとも言えるテグスの発見と鳴門市の堂浦・・・司馬は「明石海峡と淡路みち」で「一本釣り漁民のくらしや村村の様子を変えた徳島県堂ノ浦という漁村の歴史のなかでの存在の大きさはどうであろう。謝恩碑でも建てられているのであろうか。」と書きましたが、その鳴門・堂浦を訪ねた『阿波紀行』では、「堂浦の漁港は、過去に生きているわけではない。(中略)が、それにしても自己の過去には恬淡なもので、一本釣りとはテグスという、日本の生産文化を変えた歴史をもちながら、碑ひとつない。」と書かれた。それもまたよし・・・ということかもしれませんし、何とかその記録を残してほしいという気持ちかも知れません。(館長)

江戸時代に徳島藩はなかったという話

江戸時代の国家体制を幕藩体制と呼び、テレビの歴史番組や歴史書でも江戸時代の地方のことは〇〇藩といわれることから、藩は江戸時代の制度として置かれたものと思っている人が多いようです。

それは徳島でも同じです。蜂須賀氏が支配した近世の阿波は、徳島藩・阿波藩・蜂須賀藩などといわれ、どれが「正しい」のかという見解の相違もあります。ちなみに当館の常設展では、江戸時代の阿波・淡路を「徳島藩」としています。

今日、1万石以上の大名の領地と支配機構を藩と呼び、国・郡・城下町などの地名、大名の姓を冠して名称とすることが一般的です。

「藩」という言葉は、中国古代の周という王朝で、各地に配置された諸侯を藩屏・藩翰などと呼んだことになって、江戸時代の儒学者が大名を「諸侯」、領地や支配組織を「藩」と呼んだことに由来するものです。そして、「藩士」や「藩制」

といった熟語などがありましたし、江戸時代後期には大名領を藩と呼ぶことが多くなりましたが、江戸幕府の支配制度としては、藩という公称はありませんでした。史料用語として藩に当たるものとしては、領地は「領分」や「領」、家臣団・支配機構は「家中」があります。

したがって、江戸時代において、徳島藩・阿波藩・蜂須賀藩は、どれも制度的に決められたものではありません。そのために、現在では様々な呼び名が混在しているといえます。蜂須賀氏の領地と支配機構を意味する概念として用いるのであれば、どれでもよいということでもあります。

ところで、明治初年には、地方制度として藩が置られました。1868（慶応4／明治元）年、維新政府は旧幕府領を府・県とし、旧大名領を藩と称しました。このときに藩は初めて、正式な地方行政区画となりました。さらに翌年、版籍奉還に伴い、政府は阿波・淡路2か国から成る徳島藩を設置し、旧藩主蜂須賀茂韶を知藩事に任命しました。ここに、政府の地方機関としての藩が置かれたのです。この徳島藩は、1871（明治4）年の廃藩置県までの短い間存在しただけです。そして、名実ともに制度として徳島藩があったのは、この明治初年だけのことでした。

目新しいことではありませんが、誤解の多いことなので、紹介してみました。

（歴史担当：長谷川賢二）

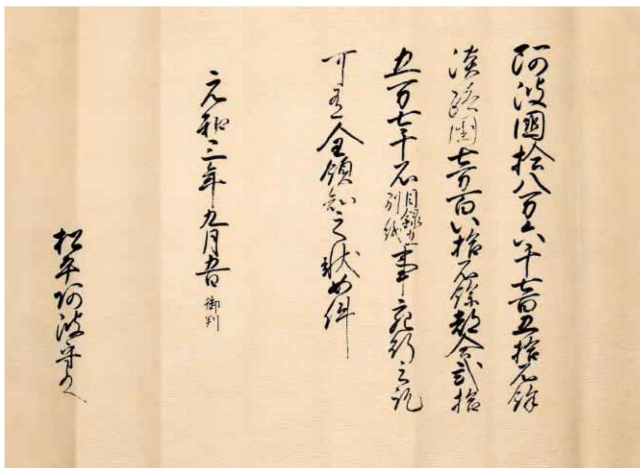


図1 徳川秀忠判物写（複製）

当館蔵（原品 国文学研究資料館蔵）。1617年（元和3）、將軍徳川秀忠から蜂須賀至鎮に出された領地宛行状。これによって、蜂須賀氏は阿波・淡路2か国の支配を保障されました。



図2 徳島藩印と印影

当館蔵。蜂須賀家熱海別邸旧蔵資料のうち。明治初年に用いられたものかと思われます。

空から見た徳島

県立博物館では徳島県消防保安課と消防防災航空隊の協力を得て、ヘリコプターの一般行政利用の一環として、飛行訓練中に徳島県内各地の写真撮影を行ってきました。地形や環境あるいは徳島県の空から見た現状を写真データとして残すことを目的にしたものです。これまでに、県内の古墳や遺跡、銅鐸の出土地をはじめ、河川の形状や海岸地形、ため池、さらに渡りをするチョウとして有名なアサギマダラの飛来地などのテーマを設定して撮影を行ってきました。

今回の特別陳列は、それらの写真の一部を徳島の現状として紹介します。また、その地域の古い写真がある場合には、その時代と現在との比較なども含めて空からの徳島の姿を見ていただくとするものです。



徳島市八万町文化の森周辺（東から）



徳島市城山周辺（南東から）



牟岐町出羽島（南東から）



三好市東祖谷三嶺頂上の池（南から）

- 会 期 2009年1月27日(火)
～3月15日(日)
- 休館日 毎週月曜日
- 観覧料 無料
- 会 場 徳島県立博物館1階
企画展示室

主な写真の内容

- ・徳島の遺跡・古墳・銅鐸出土地
- ・県南の海岸
- ・伊島，出羽島・津島・牟岐大島
- ・剣山系
- ・吉野川，園瀬川，那賀川の流域
- ・アサギマダラの飛来地

てつがんせき

“鉄丸石”

ここで紹介するのは、丸くて茶褐色の石です(図1)。手に取ると、ずしりとした重みがあります。中心に軸があるため、表面にへその穴のような窪みや出っばりがあります。縦方向の断面では、軸から放射状に伸びる細かい構造も見えます。高知県室戸岬周辺の泥岩の地層に入っており、洗い出されたものが近くの海で拾えます。

類似の石は千葉県房総半島、神奈川県三浦半島などでも知られており、鉄丸石、へそ石などの名でよばれています。また、江戸時代中期の有名な奇石収集家である木内石亭の旧蔵品の中にも石瓜という同様の石があります(図2)。

鉄丸石の成因として、硫化物に富んだ海底の泥から出てくるガスによってできた黄鉄鉱のコンクリューション(堆積物のかたまり)という説(Katto, 1965など)、冷湧水の噴出口とする見解(伊藤・高橋, 2008)などがあります。

図1の資料が当館に寄贈されたのは2003年のことで、私にとっては初めて見るものでしたが、何かの動物の巣穴化石(生痕化石)ではないかと思いました。そこで生痕化石が専門の小竹信宏先



図1 斜め上から見た室戸市産「鉄丸石」。浅い窪みが見える。直径約13cm。

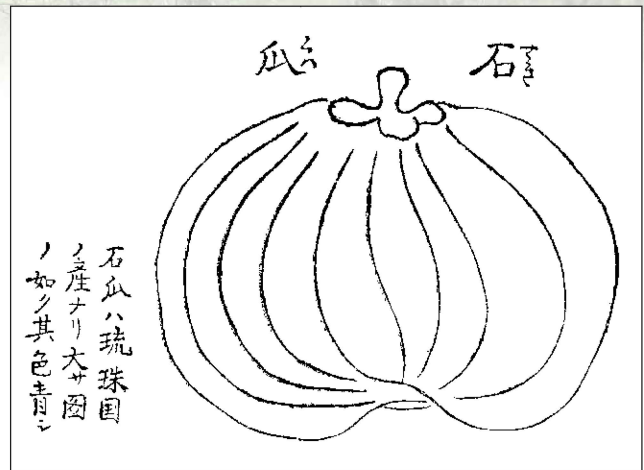


図2 木内石亭著「雲根志」に描かれた「石瓜」。生野鉱物館(兵庫県)にある現物と思われる石とはやや印象が異なる点もあるが、“へそ”は明瞭に描かれている。

生(千葉大学理学部教授)に問いあわせたところ、次のことを教えていただきました。

- ・問題の石はやはり生痕化石で、名称はタッセリアア(*Tasselia isp.*)が適切である。
- ・多毛類の棲管であろうという指摘がある。
- ・中心部の軸は巣穴と解釈できるが、周辺部に見られる細かい構造の正体はよくわからない。
- ・この類の生痕化石は“珍品”らしく、原記載以降は世界各地を見てもほとんど産出の報告がなく、研究も進んでいない。

また、三浦半島産“へそ石”はタッセリアと同じものだろうとの指摘もあります(蟹江, 1985)。

以上のことから鉄丸石は生痕化石タッセリアに同定できます。その一方で、コンクリューション化には冷湧水などが関係している可能性もあります。鉄丸石のこれからの解明が待たれます。

(地学担当：中尾賢一)

《参考文献》

- 伊藤 剛・高橋秀介, 2008. 鉱物コレクション入門. 築地書館.
 蟹江康光, 1985. 横須賀の地質. 横須賀文化財団協会.
 Katto, J., 1965. A note on some concretions from the Muroto Formation of Kochi Prefecture, Shikoku, Japan. Research Report of Kochi University, Natural Science, 28, 1-11.

「マイキリ」は大昔の火おこしの道具ではないと聞いたのですがほんとうですか？

独特の形をした「マイキリ」(図1)は、テレビなどの映像を通して火おこしに使われるようすを目にする機会が多く、大昔から使われている火おこし道具(発火具)だと思われている方が多いようですが、実は違います。

現代のようにマッチやライターを使って簡単に火をおこすことができるようになったのは、実はつい最近と言ってもよい明治時代以降のことです。

それ以前は、いわゆる火打ち石による火花式発火法が主流でした。火打ち石は、チャートやメノウなどの非常に硬い石と鉄をたたき合わせた際におこる火花を利用する発火具です。わが国に鉄が伝わったのは弥生時代のこと。当然のことながら鉄が普及するまでは火花式発火法はなかったが、あるいはあったとしても一般には使えない特別なものだったでしょう。火花式発火法に用いるヒウチガネが遺跡などから多く出土するようになるのは、鎌倉時代以降のことです。

火花式発火法が主流となる以前の発火法が、マイキリを含めた木と木をこすり合わせた際の摩擦熱を利用して火をおこす摩擦式発火法です。摩擦式発火法は、世界的にみれば非常に多くの方法があります。そのうち、わが国で行われたと考えられるものは、キリモミ式、ヒモキリ式、ユミキリ式(図2)、それとマイキリ式です。

1970年代に、弥生時代の大型集落として有名な静岡県の登呂遺跡から出土したマイキリの部材とよく似た木製品を根拠に、弥生時代の発火法がマイキリ式だったと考えられるようになり定説化しました。しかしその後、登呂遺跡出土木製品を発火具



図1 マイキリ

として、

としてみた場合、小さすぎて実際にはうまく火がおこせないこと、戦国時代に描かれた『七十一番職人歌合絵巻』などには、孔をあける道具として小型のマイキリが登場することなどから考えて、弥生時代のマイキリも勾玉などの石製装飾品などに孔をあけるための道具(穿孔具)だったと考えられるようになりました。一方で、伊勢神宮などの記録から、江戸時代の終わりごろに儀式用の発火具として大型のマイキリを使ったことがわかります。

以上のことから、発火具としてマイキリが使われるようになったのは、江戸時代の終わりごろ、神社などでの儀式に使われたのが始まりと考えられます。

では、鎌倉時代以前、火打ち石が普及するまではいったいどんな発火具が使われていたのでしょうか？ 出土品などから考えて、キリモミ式やヒモキリ式、ユミキリ式が考えられます。

徳島県立博物館では、毎年、体験学習としてマイキリによる「火おこし」を行っています。マイキリを使えば、腕力が弱い女性やこどもでも比較的容易に火をおこすことができます。その際には、マイキリは実は大昔の発火具ではないということをはっきりと伝えていきます。それでも摩擦式発火法で火をおこすことはそんなに楽なことではありません。みなさんも、ぜひ一度「火おこし」を体験してみて、大昔の人の苦労を実感してみてくださいはいかがですか？ (保存科学：魚島純一)

《おもな参考文献》

『原始時代の火』 岩城正夫 1977年 新生出版

『火の道具』 高嶋幸男 1985年 柏書房

『焚き火大全』 関根秀樹ほか編 2003年 創森社

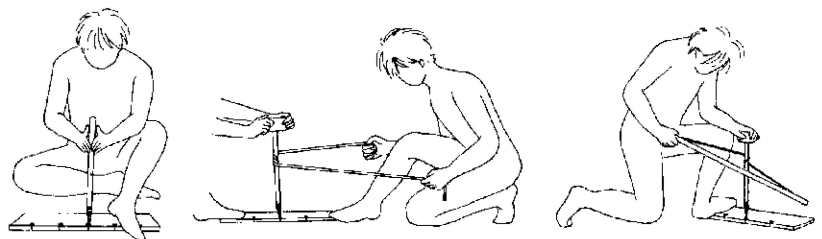


図2 いろいろな摩擦式発火法(左からキリモミ式、ヒモキリ式、ユミキリ式)

1月から3月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象(定員)	備考
歴史体験	ベーゴマをまわしてみよう	1月18日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(30)	
	トンボ玉をつくろう②	2月8日(日)	13:30~16:30	要	高校生以上(20)	
歴史散歩	古墳見学③(鳴門)	3月8日(日)	10:00~16:00	要	小学生から一般(30)	現地集合
野外自然かんさつ	動物の冬越し	2月15日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(30)	
室内実習	ミクロの世界—電子顕微鏡で化石を見よう!②	1月18日(日)	10:00~12:00	要	小学校高学年以上(10)	
	落ち葉の中の生きものたち	3月15日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(20)	
ミュージアムトーク	聖(ひじり)たちの中世	1月25日(日)	13:30~15:00	不要	一般(50)	
	希少野生生物保全講座①概論:なぜ生物は絶滅するのか?	2月7日(土)	10:00~11:30	不要	高校生以上(50)	
	希少野生生物保全講座②植物の多様性と分類	2月7日(土)	13:00~14:30	不要	高校生以上(50)	
	希少野生生物保全講座③希少野生植物の保全	2月7日(土)	14:45~16:15	不要	高校生以上(50)	
	希少野生生物保全講座④希少昆虫類の保全	2月8日(日)	13:00~14:30	不要	高校生以上(50)	
	希少野生生物保全講座⑤希少淡水魚の保全	2月8日(日)	14:45~16:15	不要	高校生以上(50)	
	念仏踊りと阿波	2月22日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
部門展示関連行事	近世阿波のやきもの	3月22日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
	部門展示「笠井氏の見た大阪万博」 「粟飯原家所蔵人形頭コレクション」展示解説①	2月1日(日)	13:30~14:30	不要	小学生から一般	観覧料必要
	部門展示「笠井氏の見た大阪万博」 「粟飯原家所蔵人形頭コレクション」展示解説②	3月1日(日)	13:30~14:30	不要	小学生から一般	観覧料必要

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。

◎部門展示の展示解説は常設展観覧料がそれぞれ必要です(高校生以下は無料)。

●お申し込みについて●

◎1枚の往復はがきには、1行事のみご記入ください。

◎行事日の1か月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。

◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。

◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。

◎原則として、参加費は無料です。

記入例

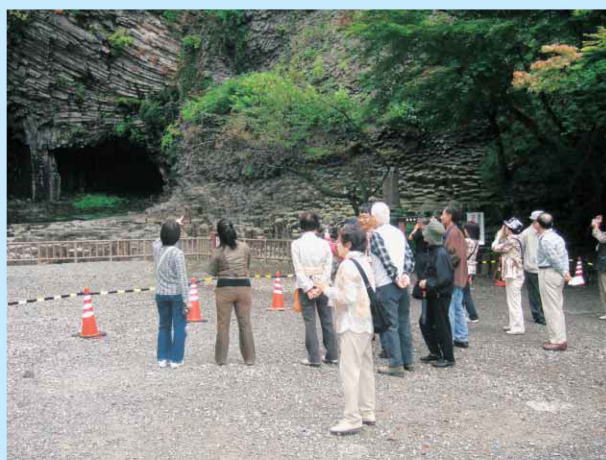
〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
50 770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館 普及課	何も書かないで ください	50 □□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の 行事名 2. 参加希望者 全員名(学年) 3. 住所 4. 電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館普及課へ(電話088-668-3636)

博物館友の会の行事紹介

2008年10月、友の会行事「但馬・丹波一泊研修の旅」を行いました。会員37名の方が参加し、有意義な研修旅行となりました。

- 第1日 ○兵庫県立人と自然の博物館
○丹波竜発掘現場・化石工房
○竹田城址
- 第2日 ○玄武洞 ○出石城下町
○生野銀山



兵庫県豊岡市玄武洞にて

博物館ニュース No.73

■発行年月日 2008年12月1日
 ■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp>